

雲母集

北原白秋

青空文庫

きらら。雲母。うんも。玉タマのたぐひにて、五色ゴシキのひかりあり。深山オクヤマの石イシ
アヒダの間にいでくるものにて、紙カミをかさねたるごとくかさなりあひて、剥ハげば、よ
 くはがれて、うすく、紙カミのやうになれども、火ヒにいれてもやけず。水ミヅにいれて
 もぬるゝことなし。和名（雲母和名、岐良々）

『日本大辞林』

新生
序歌

力

煌々くわうくわうと光りて動く山ひとつ押し傾かたぶけて来くる力はも

卵

煌々くわうくと光りて深き巢のなかは卵たまごばかりつまりけるかも

大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも

かなしきは春画の上うへにころがれる七面鳥の卵たまごなりけり

大鴉

大鴉一羽渚に黙もだふかしうしろにうごく漣の列

大鴉一羽地に下り昼深しそれを眺めてまた一羽来し

昼渚人し見えねば大鴉はつたりと雌めすをおさへぬるかも

大鴉渚なぎあり歩けど麗うららなる波はそこまでとどかざりけり

寂じやくくわう光の浜に群れるる大鴉その真上まうへにまた一羽来し

一羽飛び二羽飛び三羽飛び四羽五羽飛び大鴉いちどに飛びにけるかも

大空の下もとにしまし伏したり病やみがらす鴉生きて飛び立つ最後に一羽

犬

水の面にも白きむく犬姿うつし口には燃ゆるくれなゐ紅の肉

丸木橋まるきはしの上と下とを真白きものくわうくわう煌々として通りけるかも

魚介三品

水の面に光ひそまり昼深しぬつと海亀息吹きにたり

日ざかりは巖を動かすふなむし海蛆もはつたりと息をひそめけるかも

ふかざめだいち鱧は大地の上は歩あるかねばそこにごろりとこがりにけり

穴

ふかぶかと眼まなこひらけばどん底に何か光りて渦巻くらしも

薔薇

盤ばん石しやくに圧し伏せられし薔薇ばらの花石をはねのけ照てり深みかも

雲

大空に何も無ければ入道雲むくりむくりと湧きにけるかも

流離抄

三崎哀傷歌

大正二年一月二日、哀傷のあまりただひとり海を越えて三崎に渡る。淹留旬日、幸に命ありてひとまづ都に帰る。これわが流離のはじめなり。

前夜

雪深し黙くぐみるたれば紅くれなゐの月いで方となりにけるかな

河口

思ひきや霧の晴間はれまのみをつくし光りゆらめく河下見れば

朝霧にかぎり知られぬみをつくしかぎりも知らぬ恋もするかな

朝霧に光りゆらめくみをつくしいまだ死なむと吾が思はなくに

三崎真福寺

日だまりに光りゆらめく黄薔薇くわうしょうびゆすり動かしてゐる鳥のあり

黄薔薇くわうしょうび光りゆらめくとも知らず雀飛び居りゆらめきつつも

二町谷

寂しさに浜へ出でて見れば波ばかりうねりくねりあきらめられず

寂しさに男三人浜に出で三人そろうてあきらめられず

八景原

海人が子が潜り漕ぎたみみるめ刈るここの漣かぎり知られず

八景原の崖に揺れ揺るかづらの葉かづら日に照るあきらめられず

小牛ゐて薊食み居り八景原小牛かはゆしあきらめられず

来て見ればけふもかがやくしろがねの沖辺はるかにゆく蒸汽のあり

日が照る海がかがやく鰯船板子たたけりあきらめられず

八景原はつけばら春の光は極みなし涙ながして寝ころびて居る

あまつさへ日は麗らかに枯草のふかき匂ひもひもじきかなや

日の光ひたと声せずなりにけり何事か沖に事あるらしや

ただひとつあか紅き日の玉くるくると沖にかがやくあきらめられず

空赤く海また赤し八景原はつけばらなかのとんがり山なぜ黒いぞな

雲雀啼く浦の廓くるわの田圃たんぼみち行けばさびしもまだ日は暮れず

華魁ヶ浜

何かしら笑ひ泣きする心なり野菜畑に鯛ころがる

来て見れば翺ころがる 蕪^{かぶらばた} 畑 蕪みどりの葉をひるがへす

城ヶ島

日暮るれば枯草山の枯草をただかきわけていそぐなりけり

夕されば涙こぼるる城ヶ島^{じやう}人間ひとり居らざりにけり

帰途

おめおめと生きながらへてくれなるの山の椿に身を凭^よせにけり

大川端

夕暮の余光のもとをうち案じ空馬車馭してゆく馭者のあり

屋根の太陽は赤く濼おどみて石だたみ古るき歩道ほだうに暮れ落ちにけり

夕されば大川端に立つ煙重く傾むく風吹かむとす

悲しくも思かたむけいつとなくながれのきしをたどるなりけり

風寒く夕日黄きばめり冬の水いま街裏まちうらを逆押してゆく

枯草ぐるま

夕さればひとりほつちの杉の樹に日はえんえんと燃えてけるかも

あかあかと枯草ぐるまゆるやかに夕日の野辺を軋きしむなりけり

悲しともなくなつかしかがやかに夕日にかへる枯草ぐるま

道のべの道陸神だうろくじんよあかあかと日照り隈くまなし道陸神よ

日は暮れぬ人間ものの誰知らぬふかき恐怖おそれに牛吼えてゆく

三
崎
新
居

三崎新居

大正二年四月下浣、家をあげて三崎向ヶ崎に移る。

恍^{くわうこう}惚^{こつ} とよろめきわたるわだつうみの鱗^{いろうこ}の宮^{みや}のほとりにぞ居る

新生

水あさぎ空ひろびろし吾が父よここは牢獄^{ひとや}にあらざりにけり

深みどり海はろばろし吾が母よここは牢獄^{ひとや}にあらざりにけり

不尽抄

不尽ふじの山やまれいろうとしてひさかたの天てんの一方いつぱうにおはしけるかも

ほがらかに天てんにすべりあがる不尽ふじの山やまわれを忘れてわがふり仰あやぐ

わがこころ麗うららかなれば不尽ふじの山やまけふ朗らうらかに見みゆるものかも

不尽ふじの山やま麗うららかなればわがこころ朗らうらかなになりて眺ながめ惚おぼれて居ゐる

同じく

ある時

父^{かぞいろ}母^{かぞいろ}と海にうち出でめづらかに浮世がたりを吾がするものか

不^{ふじ}見^みると父^{かぞいろ}母^{かぞいろ}のせてかつをぶね大きな櫓をわが押しにけり

垂^た乳^ら根^{ちね}のせちに見むといふ不^{ふじ}尽^{じん}の山いま大空にあらはれにけり

大^{おほ}方^{かた}にうれしきものを不^ふ尽^{じん}の山わが家^やのそらに見えにけるかも

大きなる櫓權かついで不^ふ尽^{じん}の山眺め見わたす男なりけり

五月

魚さかなかつぎ丘かみにのぼれば馬鈴薯じゃがいもの紫の花いま盛りなり

れいろうと不ふ尽じの高嶺たかねのあらはれて馬鈴薯畑じゃがいもはたの紫の花

ある時は

ある時は眼まなこひきあけ驚くと鮮あざやかなる薔薇ばらの花買ひにけり

ある時は命さびしみ新らしき蠮かきの酢蠮かきを作らせにけり

ある時は大地だいちの匂においぶんぶんとにほふキヤベツの玉もぎて居り

ある時は独ひと行くとてはつたりと朱の断面に行き遇ひにたり

ある時は巢藁代へむとせしかどもその巢に卵のうまれてありけり

ある時は赤々と日のそそぎやまぬ首くびく縊りの家を見恍ほれてゐたり

ある時は何も思はず路のべの赤馬あかの尻毛に手てを触ふれてゐつ

ある時は遠眼鏡もて度つつましくあそぶ千鳥を凝視みめてあるも

ある時は小さき花瓶くわびんの側面かたづらにしみじみと日の飛び去るを見つ

ある時はおのが家内やうちを盗ぬすび人のごとく足音あのとをぬすみてあるも

ある時は誰知るまいと思ひのほか人が山から此方向こち向いてゐる

ある時はただ専念ひとむきに一匹の大鯛釣ると坐りたりけり

生きの身

生きの身の吾が身いとしみ牛の乳ちちまだきに起きてまづ吸ひにけり

生きの身の吾が身いとしも鯛釣るとけふも岬の尖端とつばなに出いで

生きの身の吾が身いとしくもぎたての青豌豆の飯いひたかせけり

麩パンをパ買ベひ紅薔薇べにぼらの花もらひたり爽やかなるかも両手りやうてに持てば

生きの身の吾が身いとしみしくしくと腐れ鮑あはびを日に干しにけり

雲
母
雲

水垂

水垂みづたれの岩はぎまの峽せうまを垂る水の蕭々せうくとして真昼なりけり

水垂の松のかげゆくあはれなり麗らなる日のべら釣り小舟こぶね

城ヶ島の白百合の花大きければ仰ぎてぞあらむあそびの舟は

崖の上の歓語

大きなる匍ひ下り松の枝の上漣かがやき鳥ひとつある

海雀つらつらあたまそろへたり光り消えたり漣見れば

この憎き男たらしがつつじの花ゆすり動かしていつまで泣くぞ

深潭しんたんの崖の上なる紅躑躅あかつつじ二人ばかり照らしけるかも

恐ろしき淵のまはりを海雀光り列つらなめ飛び居りあはれ

かき抱けば本望安堵の笑ひごゑ立てて目つぶるわが妻なれば

帰命頂礼この時遙か海雀光りめぐると誰か知らめや

帰命頂礼消えてまた照る海雀人は目をとち幽かにひらき

帰命頂礼誰し知らねば海雀耀きの輪をつくりまた消けつ

深淵

しんしんと淵に童が声すなれ
瞰下せば何もなかりけるかも

深潭にちらちららと白雪のけはひつめたく沈む人かも

いつまでも淵に潜りの影見えずあまり深くも潜りけむかも

潜りの子真逆さまに頭より躍り入りたり親の子なれば

この淵にひそみて久し潜りの子親の子なれば玉藻刈るらむ玉藻刈るらむ

蓴菜

恋しけどおゆき思はず 蓴菜しゆんさいの銀の水泥みじろを掌てに掬ひ居つ

人なればわれもまことに憔悴す蓴菜光れこの沼深く

蓴菜を掬へば水泥みじろ掌てにあまりて照り落つるなりまた沼ふかく

明るさや寥しさや人も来ず裸になれど泣くすべ知らずも

寂しけどおのれ耀き頸うなかぶす膝までも深く泥どろに踏み入り

驚きてつくづく見れば鰻なり一面に光る沼のまんなか

この沼ゆなにか湧きあがる恐ろしき光ある見て逃げ上るわれは

照りかへる薄苳すすきがるかや萱かやさみどりのひろびろし野にほつと出でつも

眼鏡橋

眼鏡橋めがねぼしくぐりゆく水のをりをりに深く耀きやがて消えつも

流れかね耀かがやきの輪を水つくるそこに野菜を洗へり真青まきをに

日ざかりは短艇ボート動かず水ゆかず濁かたはつぶつぶ空は燦きらきら々々

寂しけど何も思はずこの瀉かたの銀ぎん泥どろの中に櫂かを突き入れ

わが短艇ボート力ちからいつぱい動かすと櫂かを突き入れ突きかがまるも

眼鏡橋めがねぼしを中にわたして茶屋三戸くるわこの廓くわは日の照るばかり

日の光いつばいに照る眼鏡橋誰か越えむとする眼鏡橋

眼鏡橋に西瓜断ち割る西瓜売今ぞ廓くるわは昼寝のさかり

真昼まつひるま間子どもつまづきしばらくは何の声だにせざりけるかも

眼鏡橋の眼鏡の中から眺むれば柳いつぼん一本風にゆらるる風にゆらるる

白日逍遙

寂しけど麦稈帽子ゆ照りこぼるる夏の光を凝視みつめて行くも

寂しけど煌々と照るのぼり坂ただ真直まつすぐにのぼりけるかも

幅びろの光なだるるなだら坂動くばかりに見えにけるかも

崖の上に照りてゆらめくものひとつ大いなる百合と見て通りたり

寂しさに油壺から小網代こあじろへ歩みかへせど昼ふかみかも

寂しさに山の真昼の赤鳥居深くぐりてまた出でて来るも

屁への神の赤き祠ほこりの真つ昼間大肌になりて汗ふきにけり

城ヶ島

草ふかき切りそぎ崖に大きなる男寝て居る寂しきものか

鶺鴒の鳥と共に飛ばむとしたりしか鶺鴒の鳥飛ばんとして飛びてゆく

飛びかける鳥につかまれ燦きらめく魚生きたる心地もなかるらむあはれ

飛びかける鳥魚をつかみあはれあはれ輝きの空に墜おちなむとする

しみじみと海のはたてに見し煙いつのまにやら大船となる大船となる

いつまでも向う向きたる人の頭いよよ光ればいよよ憎しも

城ヶ島の女子をなごうららに裸となり見れば陰ほと出しよく寝たるかも

城ヶ島の女子うららに裸となり鮑取らいで何思もふらむか

うつらうつら海を眺めてありそうみの女子裸となれりけるかも

海外の浜

蛸壺に蛸ひとつづつひそまりてころがる畑の太葱ふとねぎの花

深々と人間笑ふ声すなり谷一面の白百合の花

真白なるところでんぐさ干す男くわうく煌々と照り一人ひとりなりけり

菖蒲園

なにしかも一人ひとりひそかに白菖蒲しろあやめ咲けるみぎはに來りしものか

ひとり来て涙落ちけりかきつばたみながら萎み夏ふかみかも

明るけどあまり真白ましろかきつばたひと束にすれば何か暗かり

真白にぞ輝りてさびしきかきつばた白き犬つれ見にと吾が来こし

あはれなる廊くるわの裏のかきつばた夕ゆふさり覗く目もあるらむか

遊ヶ崎遊泳

さんさんと海に拔手ぬぎてを切る男しまし目に見え昼はふかしも

ちちのみの父を裸になしまるらせ泳ぎにとゆくその子が二ふたり人

寂しければもうて両手張り切り相模灘を拔手切りゆく飛びゆくばかり

躍りをど入り拔手切れどもこの海の渦巻く潮うしほの力深しも

拔手を切り一いちれつ列にゆく泳およぎ手の帽子ましろに秋風の吹く

山海經

狐のかみそり

しんしんと寂しき心起りたり山にゆかめとわれ山に来ぬ

この心断崖きりぎしの上にいと赤き狐のかみそり見れど癒いえぬかも

狐のかみそり血の出づるやうな思して踏みてゆかねば入日が赤し

狐のかみそりかたまりて赤し然れどもひとつびとつに風吹けりけり

狐のかみそりしんしんと赤し然れどもかたまりて咲いげば憤きどほろしも

毒ある赤き狐のかみそりは悲しき馬に食ましてかな

註、馬この花を食らへば死す

ただひとり鴉殺すとはばかり紅く踏みしく狐のかみそり

淫らにして恒心なきもの実^{じつ}に寂しそこにもここにも狐のかみそり

原つばに狐のかみそりただ赤しわつとばかりに逃げ出すわれは

海光

海にゆかばこの寂しさも忘れむ海にゆかめとうちいでて来ぬ

漕ぎいでてあはれはるる来^こしものか沖に立つ波かぎり知られず

われと櫓をわれと礼拝おろがむ心なりひとすぢに水脈みを光らしてゆけば

金色こんじきの飛沫しぶきつめたく天そらをうつ大海だいかいの波は悲しかりけり

一心に舟を漕ぐ男遥はるに見ゆ金色の日がくるくると射さし

尿いばりすれば金の光のひとすぢがさんさんと落ちて弾はぢきかへすも

北斎てんの天をうつ波なだれ落ちたちまち不二は消えてけるかも

飛の魚強くはばたきひとつらね一列飛びて翔かけれりくるしきか海が

飛の魚連つれて一列挿櫛ひとつらさしぐしの月形つきがたなせば君の恋しき

躍り入りひとり泳げばしみじみと寂しき魚の臍突きに来ぬ

泳げば底より足をひくものあり人間の足をひくものあり

大きな人あらはれて目の前に不意に舟漕ぐうれしさうれしさ

炎々と入日目の前の大きな静かなる帆に燃えつきにけり

はてしなくおほらにうねる海の波暮れてひもじき夜となりにけり

舟とめてひそかに黙す闇の中深海底の響きこゆる

はてしなき海の真中に舟をうけ泣くに泣かれずわれは烏賊釣る

我は烏賊釣る鼠子のごと軽卒しく悲しき烏賊を夜もすがら釣る

烏賊釣ると海の真底のいと暗きものの動きを凝視め我居り

あなあはれ人間闇の海にゐて漁火を焚くその火赤しも

赤硝子

赤硝子戸びつたりと閉め音もなしそこに生物われひそみ居つ

赤硝子戸びつたりと閉めなにもものも入るなかれとひそみて居るも

日の光いつばいに射しわが手足赤硝子よりさらに赤しも

赤硝子窓腐れ鮑を日に干すとしよんぼり母の外に立たす見ゆ

赤硝子戸、赤き卵の累々るいくとつまりたる函縁ゑんがは側に見ゆ

赤硝子外そとの光に押し黙だまり赤き人間何をか為すも

一二方ふたかたに向きて犬ゐる赤硝子戸うちたたきても逃げざりにけり

寂しき日

庭前小景

かぢめ舟けふのよき日にうちむれていちどきにあぐる棹のかなしも

春過ぎて夏来るらし 白妙しろたへのところてんぐさ取る人のみゆ

日は麗ら薔薇さうびあまりに色紅あかしわつと泣かむと思へどもわれ

日の光そこにかんかん真四角の氷の角は照らされにけり

天を見て膨れかがやく河豚ふぐの腹ぽんと張り切る昼ふかみかも

青芝にそつと放せば昼深み生いきの伊勢蝦飛びはねにたり

ゆつたりと蒲団の綿は干されたり傍そばに鋭き赤たうがらし

しみじみと水にひたせど真珠貝遂に水をも吸はざりにけり

餌舟ゑさぶねに光り漕ぎ寄り静まれる舟いちどきに動きけるかも

鰻

庭前小景

鰻籠はぢぎれむばかりゆらゆら日をいつぱいに浴あびてけるかも

籠の中につまる鰻の底そこちから力うねりやまずも麗うららかなれば

思ひあまり躍りゆらめく鰻籠ちつと抑ゆるこころなりけり

麗^{うら}らかやなにか恐れて鰻の児籠^{うら}をするりと抜けてけるかも

庭もせにくれなるふかき松葉菊鰻飛び超えゆくへ知らずも

麗^{うら}らかに鰻探すと松葉菊わけて大きな目を瞠^{みは}り居り

紅き花をかきわけて見れば鰻の児隅にとろりと居たりけるかも

松葉菊ふかく紅けば鰻の児安心をして動かざりにけり

花の中に抑へられたり鰻の児命^{いのち}懸^かけにて逃げにしものを

海底

庭前小景

寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚たこ逃げてゆく真昼の光

章魚たこを逃がし海を覗のぞけば章魚たこが歩ある行くほかに何にもなかりけるかも

海底うなぞこの海鼠なまこのそばに海胆ひとで居りそこに日の照る昼ふかみかも

動かねどをりをり光る朱海胆あかひとでしみらに見れば歩めりにけり

寂しさに手足動かす朱海胆あかひとで海胆の上に重なりにけり

海峡の夕焼

庭前小景

石崖に子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕焼小焼

二本づつ鯖を投げ出す二本の手そろろうて光りてありにけるかも

棧橋にどかりと一本大鮪いっぽん放はふり出されてありたり日暮ひくれ

しんしんと夕さりくれば城ヶ島の魚籠いけす押し流し汐満ちきたる

舟漕ぎ寄せ沖の魚籠いけすにざらにあくる伊勢蝦赤し夏の夕ぐれ

わが父を深く怨むと鰻籠蹴りころばしてゐたりけりわれ

櫂おつとり舟に飛び下りむちやくちやに漕ぎまはる赤き赤き夕ぐれ

城ヶ島の落日

城ヶ島の燈明台にぶん廻す落日いりひ避雷針に貫ぬかれけるかも

城ヶ島さつとひろげし投網なげあみのなかに大日だいにちくるめきにけり

大日輪落ちつきはらひ伊豆の岬さきの天城山あまぎやまへとかかりけるかも

良夜

今宵^{こよひ}ことに月明らかに海原の底のことごとはつきりと見ゆ

赤々と十五夜の月海にありそこに泳げる人ひとり見ゆ

大^{だい}の月海の中からまんまろくまろびいづれば吾泣かむとす

深夜

憤^{いきどほり}怒抑へかぬれば夜おそく起きてすぱりと切る鮪^{まぐろ}かも

自然
静観

漣

病床吟

波つづき銀のさざなみはてしなくかがやく海を日もすがら見る

網高く干せるその上の漣のかぎり知られねさざなみの列

見廻せどたへて人こそなかりけれ海の漣ただ光り消え

漣さざなみのこのもかのも時折に光りまた消え照り光り消え

日もすがら光り消えたりうねり波思ひ出したりまた忘れたり

鳥とまり光りゆらめく海わだなか中の雁木がんぎひとつを消ぬけがにぞ見る

音もなき海のかたへの麗うつくなるわが屋やの下のさざなみの列れつ

音もなき真夏昼なか音もなく鳥は雁木を去りにけるかも

麗うつくらかや此方こなたへ此方こなたへかがやき来る沖のさざなみかぎり知られず

漣なみの上にちらばるさざなみのうへのつり舟見れど飽かなく

漣なみの光りかがやく昼深しぽんと林檎を棄てにけるかも

舟

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかなる舟の通るなるらむ

霈の雨

しみじみと海に雨ふり霈みをの雨利休鼠となりてけるかも

城ヶ島のさみどりの上へにふる雨の今朝けさふる雨のしみらなるかな

北斎の篋と笠とが時をりに投網とあみひろぐるふる雨の中

海の中に光り輪を画かく霈みをのすぢ末はわかれて行方ゆくへ知らずも

漕ぎつれていそぐ釣舟二方ふたかたに濡れて消えゆくあまの釣舟

ふたかた
 一方ふたかたになりてわかるるあま小舟み濡をも二手ふたてにわかれけるかも

通り矢と城ヶ島辺あひにふる雨の間の入海舟あひわかれゆく

薔薇静観

大きなる紅べにばら薔薇の花ゆくりなくぼつと真紅まつかにひらきけるかも

目を開あけてつくづく見れば薔薇ばらの木に薔薇あが真紅まつかに咲いてけるかも

薔薇の木に薔薇の花咲くあなかしこ何の不思議もないけれどなも

風くれば薔薇はたちまち火となれり躍をじりあがるらむうれしき風に

驚きてわが身も光るばかりかな大きな薔薇ぼらの花照りかへる

ただ見ればこれかりそめの薔薇の花驚きて見ればその花動く

午ひる過ぎてますますあか紅き薔薇の花ますます重く傾むきゆくも

薔薇の花うちゆるがむとせしかども思ひかへしつますます光り

大きな何事もなき薔薇の花ふとのはづみにくづれけるかも

急須と茶碗

日の光い照りかへせばくれなるに急須きふす動きてしじに燃ゆるも

燃えあがる急須つらつらその息をそばの茶碗に薫かをしけるかも

急須燃えそしてまろらに茶碗ゐるこの親しさの限り知られず

日ぐらし急須と茶碗とさしむかひ泣くが如しもその湯気立てば

ふつふつと小ちさき生いきもの物香かを放つうつくしきかもまんまろな盆に

いついかに誰たがさしよせし知らねども涙ぐましも茶碗と急須

急須燃え茶碗湯気ふくそれよりもなほ温かきなからひにして

思ひあまり急須と茶碗と人知れずそがひに廻まはり泣けるごとしも

何^{なん}ちやとてそげなそしらぬふりをする急須こち向け日も暮るるぞよ

盆の上に急須ありまた茶碗ゐるここの世界も安からなくに

地面と野菜



地面と野菜

大きな足が地面ぢべたを踏みつけゆく力あふるる人間の足が

畑に出でて見ればキヤベツの玉の列れつ白猫のごと輝きて居る

地面踏ぢべためば蕪かぶらみどりの葉をみだすいつくしきかもわが足の上

地面ぢべたより転ころげ出でたる玉キヤベツいつくしきかも皆玉のごと

摩訶不思議まかふしぎ思ひもかけぬわが知らぬ大きなキヤベツがわが前に居る

しんしんと湧きあがる力新らしきキヤベツを内うちから弾はちき飛ばすも

さ緑のキヤベツの球葉たまはいく層光かさねる内なかより弾はぢけたりけり

大きな眼まなこがキヤベツを見てゐたりたまらず涙ながしけるかも

ふと見つけて難有きかもさ緑の野菜のかけの大きな片足

投網うちの帰途

重々と濡ぬれし投網とあみを蕪かぶら畑ばた蕪葉かぶらばの上に吾へがかい手操たぐる

蕪かぶの葉に濡れし投網とあみをかいたぐり飛びかへ翻かへる河豚ふぐを抑へたりけり

蕪かぶの葉に濡れし投網とあみを真昼間まつびるまひきずりて歩む男なりけり

昼休憩

麦藁帽子野菜の反射いつぱいに受けて西日にかがみてあるも

昼休憩ひるやすみ秋の地面ぢべたに投げいだす百姓の恋もあはれなるかな

銀いろぎんの蕪かぶらの中に坐りたる面黒おもぐろの眼めのみ大きな娘おほ

積藁のかけむくむく湧きあがるパイプの煙見つつ真赤な日にあたり居り

秋の田の稲の刈穂の新藁の積藁のかけに誰か居るぞも

寂しければ娘ひきよせこの男力いつぱいに抱きぬるかも

日ざかりの黒檜の木の南風素つ裸なる夫婦めうとに吹くも

畑に飛んで交むつる 鵲せきれい 一点の白金光となりてけるかな

道のべの馬糞まぐそひろひもあかあかと照らし出されつ秋風吹けば

泥豚

豚小屋に呻うめきころがる豚のかずいつくしきかもみな生けりけり

豚小屋の上の棕櫚の木の裂葉より日は八方に輝きにけれ

大きなる白の泥豚照りかがやきいびき 軒とどろに地面ぢべたを揺ゆする

いぎたなき豚のいびきのともすれば靈妙音に歌ふなりけり

泥豚のあはれな鼾日もすがら雁来紅をゆすりてあるも

逞ましき種豚たねぶたの鼾はりつめたる雌めが腹ちひの乳ちひに沁みて響くかも

棕栢の木に人攀ぢのぼり棕栢の木の赤き毛をむく真昼なりけり

棕栢の木のしみ輝したる下に家畜けものあはれ命やるせなくいまつるみたり

種豚たねぶたは深く押し黙だまり棕栢の木のかがやけるもとをまた廻めぐりたり

白豚の精またまの真玉またまのあはれあはれ竜胆りんだうの花にころがりつるか

豚小屋は寂し下ゆく路赤く極まり尽きて海光る見ゆ

激しく空腹じくなりけむつるみてのち一心に豚は草食めりけり

ひとかたまり豚の児が頭うち振るが可哀いや張りつめし母の八乳房の上に

現身の泥豚の児が啼いて居りその泥豚の児と児重なり

生めよ殖えよしんじつ食ひいきいと生のいのちに相触れよ豚よ

五郎作よしんじつ不愍と思ふならば豚を豚として転がして置け

夕日が赤し餌をやれ五郎作けだものは饑うれば糞も食はむずるぞ

寂しきにか豚は豚どちしみじみと入日に起きて小便をしぬ

家畜^{けもの}らは赤くかがやき照りかへる世界の中に照り揺れやまず

丘の立秋

片岡に粟と豆とが赤ちやけて深くささやく熟^うれにけるかも

穩^{おだや}かに深く息づく枝豆に夕日あかあかと照りしみやまね

しみじみと豆をもぎれば豆の声夕日照り沁み秋の丘べに

あかき日の光の中に転^{ころ}げ出て恍^ほれたる豆が声絶えてゐる

はや秋深く俯^{うつ}むく豆畑の麦稈帽子の縁^{つば}の痛さよ

犬の小便

夕日赤し小犬しみらに岐^{わか}れ路^{みち}の間^{あひ}の青木に小^{しよんべん}便^{べん}をすも

青木に犬の小^{しよんべん}便^{べん}したたれり美しくしきかな小^{しよんべん}き青木に

目の前にしんじつかかる一^{いっぽん}本の青木立てりと知らざりしかな

何といふ^{つつ}度^つましきぞよあかあかと青木一本日に燃えてゐる

小^{しよんべん}便^{べん}して犬は寂しく飛びゆけり火の如く野菜をかきわくる見ゆ

秋高し

枯草の籠のなかなる赤ん坊が大きなる馬に乗りてゆきにけり

秋高しくゐいくゐいりりりと鳴く鳥の声は野山をけふかけめぐる

深夜抄

黍畑

三日の月ほそくきらめく 黍畑きびばたけ 黍は黍とし目の醒めてゐつ

黍畑きびばたの上なる三日の月月より細こまかき糠ぬか星ほしのかず

森羅ものなべて万象あか寝しづみ紅あかきもろこしの房のみ動く醒めにけらしも

三日の月真の闇夜にあらねども真の闇夜よりさらにさみにさみしも

ほのかなる人の言葉に触ふりたれば驚くものか黍は小夜さよふけ

三日の月谷底見れば廓くわくわにはならぶ華魁おいらん豆の如しも

小夜さよふけてほかに人こそ音すなれいづこの闇を行けるなるらむ

猫のうぶごゑ

烏羽玉ぬばたまの闇の粟穂の奥ふかくするとき猫のうぶ声きこゆ

闇の夜に躍り出でたる金無垢いぎの生の子猫のうぶ声きこゆ

母猫おやねこの大黒猫おほくろの闇に坐り大まかに啼く子を産み落し

闇の夜にうまれ落ちたる猫の児があはれあはれ猫の声すもよいま

闇の夜に猫のうぶごゑ聴くものは金環きんくわんほそきついたちの月

闇夜

何事か為さでかなはぬ願湧く海の夜ふけの闇のそよかせ

闇の夜も生活くらしたたねばとなりびと舟ひき下ろし漕ぎいでてゆく

戸あくれば金無垢の月いま走る幽かに暗きそよかせの中うち

闇の海に金無垢の月いとほそくかげうつしほのに消えにけるかも

闇ふかしひとりひそかに寝ざめして思ふはおのがいのちなりけり

空暗く入海暗し海よりも黒き島見え松動く見ゆ

一心に島と陸くがとに鳴く虫の声澄み入れり闇夜なりけり

黒き花瓶

小夜ふけて夜のふけゆけばきりぎりす黒き花瓶くわびんを啖くらへるらしも

昼見てし黒き花瓶のありどころあやめもわかね夜の闇の中

小夜ふけて黒き花瓶の把手とりてより幽かに光さすかと思ふ

二本の棕櫚

天の河棕櫚と棕櫚との間より幽かに白しふ闌ふけにけらしも

耳澄ませば闇の夜天やてんをしろしめす
図り知られぬものの声すも

棕栝二本ここの夜天の吾が声は幽かなれども偽れなくに

何物の澄みて流るる知らねどもここの夜天の光ふかしも

あなかしこ棕栝と棕栝との間より闇浮檀金の月いでにけり

臨海秋景

水辺の午後

鬱こんもり蒼やなぎと楊柳かがやくまさびしき遠き入江に日の移るなり

かげ曇る岸の葉柳時をりに深くかがやくなほ堪へられず

漣さざなみ何が憂しとて鈍にじぎん銀に暗くかげりてまた照るものか

千鳥ゐるされどあかるきさざなみの銀無垢光に眼めも向けられず

水の辺に光りゆらめく河やなぎ木橋わたればわれもゆらめく

橋をわたりつくづくおもふこれぞこのいづこより来し水のながれか

三角と豆々の葉の木が二本舟が一艘さざなみの列

とま舟の苦はねのけて北斎の爺おぢが顔出す秋の夕ぐれ

照りかへる銀のさざなみ河やなぎ白き月さへその上に見ゆ

はろばろに波かがやけば堪へがたしぴんと一匹釣りにけるかな

銀のごと時にひろぐる網の目はこれ寂寥せきれうの眼まなこなりけり

蘆と蘆幽かに銀のさざなみを立ててかこちぬ今日も暮れぬと

海原うなばらのこのもかのも銀ぎん鼠ねずみ千々に砕くるかのもこのもに

銀ながし

鳥の声黒櫛の木の照り円まろき梢うれよりきこゆ日の光満ち

遠とほ丘おかの黒櫛の木の幹なかば銀ながしたる秋の海見ゆ

遠丘の向うに光る秋の海そこにくつきり人鋏をうつ

岬見え向うの海とこなたの海光りかがやくこなたは暗く

丘の上に海見え海に岬見えその上の海に舟いそぐ見ゆ

朝出でてゆき遙けかりあま小舟黒胡麻くろごまのごとく真昼散らばり

大空に銀の点々ちらばるはあまのつり舟櫓を漕げるなり

この岬行き尽すまで急がむと思ひきはめて吾が辿るなり

金いろに光りてほそき磯はなのその一角に日の消えんとす

二町谷小景

網の目に闇えんぶだこん浮檀金の仏ゐて光りかがやく秋の夕ぐれ

両もろの掌てに輝てりてこぼるる魚のかず掬すくへども掬へどもまた輝りこぼるる

うしろより西日射させればあな寂しこんじき金色に光る漁師のあたま

駿河なる不二ふじの高嶺たかねをふり仰ぎ大きな網をさと拈げたり

落つ日の照りきはまれば何がなし小鳥岬をいま放れたり

赤き日に真向に飛ぶ鳥のはね遂に飛び入り行方知らずも

海の波光り重なり日もすがら光り重なりまた暮れにけり

山中秋景

木々の上を光り消えゆく鳥のかず遠空の中にあつまるあはれ

山峡に橋を架けむと耀くは行基菩薩か金色光に

谷底に人間のごと恋しきは彼金柑の光るなりけり

ふたかた
 二一方に光りかがやく秋の海その
 二一方に白帆ゆく見ゆ

煙立つ紅葉の峽にしろがねの入江ひらけて舟はしるなり

うら
 麗うらと日照りさしそふ秋山に心ぼそくも立つる煙か

帆をかけて心ぼそげにゆく舟の一路かなしも麗らかなれば

金の星このもかのもの岨をゆく彼らは枯草負ひたる童

松並木中に一点寂しきは金の茶店の甘酒の釜

大きな赤き円日海にありすなはち海へと下りけるかも

引橋の茶屋のほとりをいそぐときほとほと秋は過ぎぬと思ひき

漁村晩秋

あなあはれ日の消えがたの水ぎはに枯木一本赤き夕ぐれ

かくのごとき秋の寂しさわれ愛す枯木いちぼく一本幽かに光る

那辺なへんより出で来し我ぞ行く我ぞ頭幽かすかにかがやき光り

秋の色いまか極まる声もなき人豆のごと橋わたる見ゆ

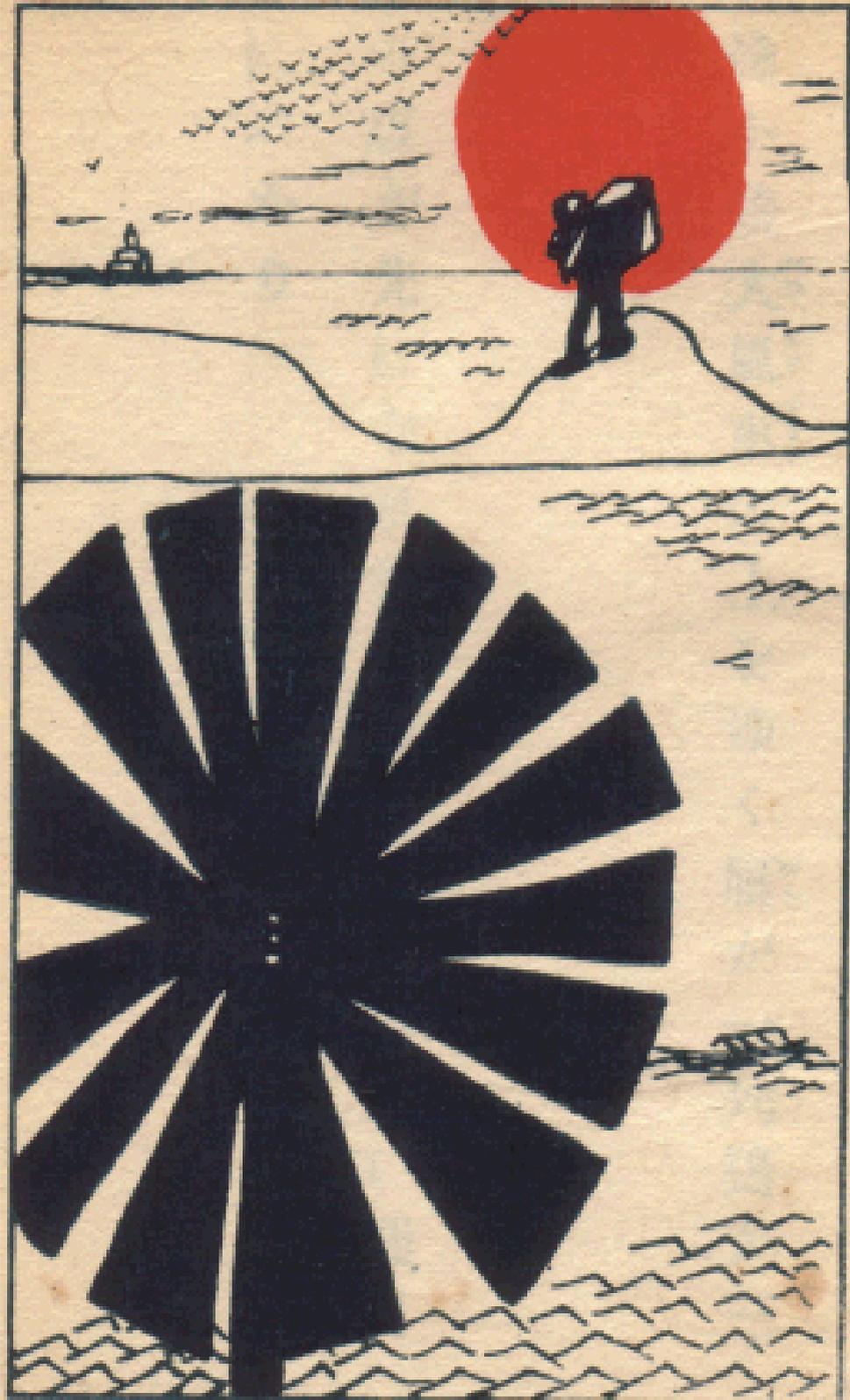
人はいまいちばん一番高き木のうへに鴉鳴く見て橋わたりたり

一心に遊ぶ子どもの声すなり赤きとまやの秋の夕ぐれ

藁屋ありはねつるべ動く水の辺べの田圃たんぼの赤き秋の夕ぐれ

けつけつと鳴くは何鳥あかあかと葦間あしまの夕日消えてけらずや

金の星ひとつ消えゆく思なり童子幽いかに御寺はいに入る



油壺晚景

油壺から諸磯もろいそ見ればまんまろな赤い夕日がいま落つるとこ

夕焼小焼 大風車おほかざぐるまの上をゆく雁がんが 一列鴉が三羽

後の雁あとが先になりたりあなあはれ赤い円日岬にかかり

赤々と夕日廻れば一またぎ向うの小山を人また跨ぐ見ゆ

油壺しんととろりとして深ししんととろりと底から光り

法悦三品

種蒔

金色こんじきの三角畑にしみじみと人参の種蒔けるなりけり

巡礼と野の種蒔人たねまきとなにごとか金色こんじきの陽ひに物言へりけり

ひさかたの金色こんじき光くわうの照るところ種蒔人たねまき三人背さんじんをかがめたり

巡礼がほのかなる言こと云ことひしかば種蒔人たねまき三人背さんじんをかがめたり

度つましきミレエが画ゑに似る夕あかり種蒔人たねまきそろうて身をかがめたり

金柑の木

その一 巡礼

照りかへる金柑の木がただひと木庭にいつぱいに日をこぼし居り

はるばると金柑の木にたどりつき巡礼草鞋わらぢをはきかへにけり

巡礼が金柑の木をふりあふぐ熟うれたるかもよ梢の金柑

かくなれば金柑の木も仏ほとけなり忝かたじけなやな実が照りこぼるる

かうかうと金柑の木の照るところ巡礼の子はひとりなりけり

照りかへる金柑の木のかけを出で巡礼すなはち鈴ふりにけり

その二 農人

まかがやく金柑の木の蔭に立ち黒き土くれ人掘りかへす

人ふたり光りよろめく金柑のこんじき金色の木の根をうちかへす

さくさくと大判小判の音すなれ金柑の木の根かたを掘れば

この畑の金柑のかげで云ふことをよくきいてくれそれなる娘

その三 秋風

かうかうと今ぞこの世のものならぬ金柑の木に秋風ぞ吹く

吹く風はせちに心をかきむしる人間界のわれならなくに

いつしかに金柑の木と身をなして吹く秋風に驚くわれは

その四 静坐抄

夕されば闇えんぶだ檀金こんの木の光またかうかうとよろめきにけり

ここに来て梁塵秘抄を読むときはこんじきくわう金色光のさす心地する

遠樹抄

西方に金の遠ゑんじゆ樹のただふたつ深くかがやく何といふ木ぞ

かうかうと金の射光のふたかた二方に射す野ぼらつ原に木の二本見ゆ

夕されば金の煙の立つごとく木はかうかうとよるめきにけり

金色の木をかうかうと見はるかすこれは枯野の草刈り男

金色のかの木のかげに照りかへり動くものあり人にはあらじか

虔^つましき金の歩みやつづくらむ親鸞上人野を行かす見ゆ

樹はまさしく千手観音菩薩なり西金色の秋の夕ぐれ

かうかうと風の吹きしく夕ぐれは金色の木木もあはれなるかな

見るからに秋のあはれに吹きしくは金色の木の嵐なりけり

こなた向き木々のかなしくいたぶるは金色の風の吹けばなりけり

なほしばし我を忘れて金色の木々のかなたを飛ぶよしもがな

闇魔の反射



閻魔の反射

ライ麦の畑といはず崖といはず落日いりひいつぱいに滴したたる赤さ

枯林炎々たれども枯林なにかしら寂しかの枯林

崖がけした下したのかの狂人きちがひの一軒家赤くかがやきかがやきやまず

ライ麦の青き縞目しまめの縦たてよこ横よこに赤々し冬の日の沁みてける

赤き日は人形のごとく鋏をうつ悲しき男を照らしつるかも

赤き日にかんかんとうつ鉦かねの音冬の枯野にうつ鉦の音

赤き日に棕櫚の木三本照り寂しその藁屋わらやにうつ鉦の音

鍬打て、日は三角さんかくばたけ畑のお茶の芽に赤く反射てりかへしかつ照りやまず

赤き日に黒き刺葉はりばの沁み揺るる柊ひいらぎの根を人うちかへす

大きなる閻魔えんまの朱面しゆめんくわつと照りかがやく寂しき寂しき畑

畑打てば閻魔大王光るなり枯木二三本に鴉からちらばり

鍬下ろせばうしろ向かるる冬の畑そこに真赤まつかな閻魔えんまの反射はんしゃ

馬頭観世音の前を通れば甘薯いもばたけ畑めくら盲人めくらこち向け日が真赤まつかぞよ

盲人めくらよ盲人めくら一心に何か聴きすましあかあかし顔を日に向けてゐる

悲しき悲しき闇魔の反射畑中に日が明け日が暮れ鍬うちやまず

畑打ち人形

赤き日に畑打人形が畑をうつ畑打人形は悲しき夫婦めをと

人間のこれの夫婦めをとはいと寂し人まぜもせず畑うちかへす

人間のこれの夫婦めをとはいと寂したんだ黙だまつて畑うちかへす

人間のこれの夫婦めをとはいと寂し時に尻向け畑うちかへす

涙こぼし一人うしろを向いたれば一人が真赤な日にうちかへす

時折りに夫婦向きあひ畑をうつ拝む如くに悲しき人形

大日だいにちを中なかにころがし右左畑打人形は畑うちかへす

曼珠沙華抄

秋の野にあまりに真赤な曼珠沙華その曼珠沙華取りて捨ちよやれ

二人見て来むぞ真赤な曼珠沙華松の小蔭にちよと入りて来むぞ

こち向け牝牛供養の石が立てり曼珠沙華の花赤き路ばた

耕田

曼珠沙華の花あかあかと咲くところ牛と人とが田を鋤きてゐる

秋深し

童らが遊ばずなりて曼珠沙華ますます赤く動かであるも

田舎道

大きな大きな赤き日の玉が一番赤くころがれり冬

田舎道ゐなかみちのぼりつめたるかなたより馬車あかあかとかがやきて来くも

燃えあがる落日いりひの櫓けやきあちこちに天てんを焦がすこそ苦しかりけれ

藁小屋と赤くかがやくなだら坂日をいつばいに浴びて親しも

路のべに遊ぶ童わらべがかぶる髪くわうりん 光 輪りん はなつこぼるるばかり

馬頭観世音立てるところに馬居りて下を見て居り冬の光に

金色こんじきの赤馬あかの尻毛しりげのふつさりと垂れて静けき夕なりけり

人参の髻

夕されば光こまかにふりこぼす人参の髯もあはれなりけり

木がらし

はろばろに枯木わくれば甘^{いも}諸^{はたけ}畑おつ魂^{たま}げるやうな日が落ちて居る

目も遥^{はる}に嵐吹きしく枯野原空に落日^{いりひ}が半分^{あか}紅く

人ひとりあらはれわたる土の橋橋の両^{りやう}岸^{がん}ただ冬の風

絹^{シルク}帽^{ハット}吹き飛ばしたり冬の風落日^{いりひ}真^ま赤^{あか}な一本橋に

転^{ころ}がつてゆく絹^{シルク}帽^{ハット}を追つかける紳士老いたり野は冬の風

数珠つながり赤い閻魔をぐるぐると廻る童を吹く冬の風

木がらしに白髪しらがかきたれ来るく媼おうな負へる赤子は石の如しも

大椿抄

大きな椿の樹ありあかあかとひとつも花を落さざりけり

花あまりにここだつけたる椿の枝ひきずるばかりに垂れにけるかも

山椿照りおそろしき真昼時小僧だま黙つて坂お下りて来も

積藁の上に大樹の山椿丹念に落す花まつか真紅なり

ほつたりと思ひあまれば地に紅く落ちて音する椿なりけり

大きな椿ほたりと落ちしなり屹びつくり驚するな東京の子供

大きな櫓樫かつぐと大きな櫓樫椿につかえけるかも

風吹く椿

積藁にこぼれ落つる椿火のごとしすなはち畑を風走るなり

風はしる紅き椿をひとゆすり枯木十二三本からからゆすり

風はしる目ざめし如くあかあかと椿一時に耀く紅く

畑中に紅く耀く一本椿椿飛び越え風はしるなり

枯枝の鴉吹き飛ばし風はしる椿耀く耀く紅く

カンワスをひつくりかへし風はしる椿耀く耀く紅く

耀く椿前にわが立つ一本椿風吹け風吹け耀く椿

赤き鳥居

冬の日を正面まともに受けてやや寒くまかがやく赤き鳥居小さしも

ここ過ぎて幾いくたび度涙落しけむ一尺の赤き鳥居の光

前うしろに百姓種蒔く畑中の赤き鳥居のしみらの耀き

枯木一本いっぼん赤き鳥居と石ふたつこれぞ陰陽神おんみやうじんのましますところ

夕さりくれば一人いちにんもあらずなりにけり赤き鳥居の周囲まはりの種蒔たねまき

見桃寺抄

西日抄

見桃寺冬さりくればあかあかと日にけに寂し夕焼けにつつ

明り障子冬の西日をいつぱいうけて真赤まつかになりたりあはれ

この庵いほに三月五月棲み馴れていよよ親しむ西日の反射

夕焼空蘇鉄の上うへにいと赤し蘇鉄の下したに地もまた赤し

あかあかと冬の蘇鉄にはぢく日の飛沫とばちりかなし地に沁みにつつ

吾等だままた黙つて蘇鉄見て居たりしつくりと今は落ちつきにけむ

桃の御所の庭の西日に下りて吾あが巡礼の子にもものいふこころ

ゆづり葉に西日射すときゆづり葉のかげに巡礼鉦うちにけり

赤々と碁盤ごばんの角に日はさして五目並べは吾ごが負けにけり

隣の厨

日は暮れぬ鰯いわしなほ干す旃陀羅せんだらが暗き垣根の白菊の花

寂しさに秋成が書読ふみみさして庭に出でたり白菊の花

ゆくりなく闇に大きく菊動くと見れば向うに火の燃えあがるも

火の中に不動明王おはすなり焰えんえん今燃えあがる

火の中に不動明王おはすなりあなかたじけなあなかたじけな

櫓をかつぎ漁人かまどの前をゆくその櫓たちまち火に照る赤く

火の燃ゆればあはれなること限りなしあかあかとをどる厨うつはの器

円つぶら眼の童子かまどの前に居りあなひもじさよ焰をどの躍り

寂しきは鍋にはみ出す魚さかなの尾厨あかりの火光白菊の花

鍋の尻赤くゆらめくただ楽し漁村のよき夜安らかなれよ

渚の西日

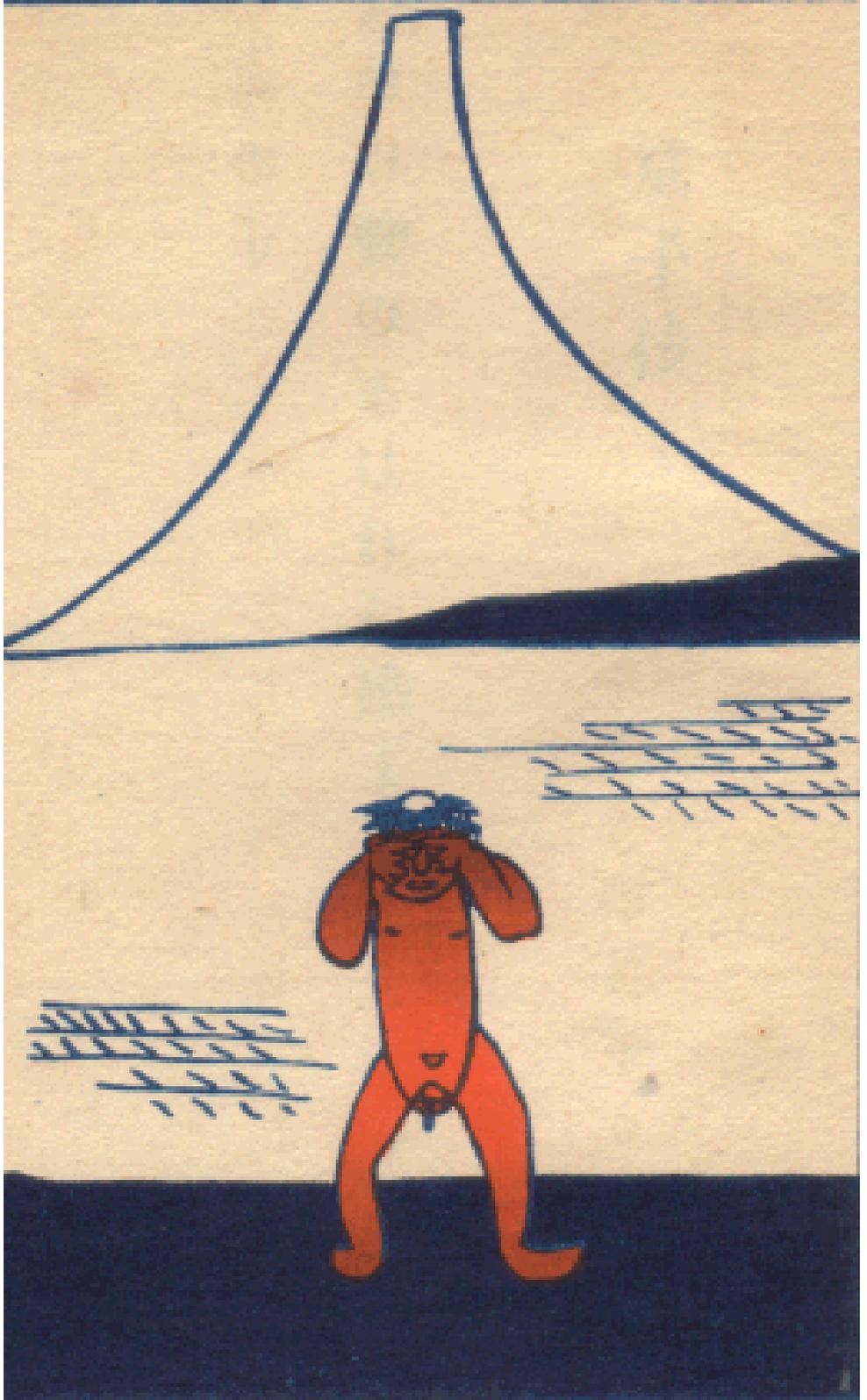
おほわだつみのまへにあそべる幼などち遊び足らずてけふも暮れにけり

赤き日に彼ら無心に遊べども寂しかりけり童^{わらべ}があたま

大きな赤き日輪海にあれど汝^なが父いまだ帰らざりけり

現身^{うつそみ}の子ども喧嘩をしてゐたり一人打^ぶたれて泣けばかなしも

泣きわめく子らが手を引き引きずりてその母帰る西日に赤く



童子抄

何事の物のあはれを感じずらむ 大海だいかいの前に泣く童あり

大海だいかいの前に投げ出されて夕まぐれ童子わがごとくよく泣けるかも

ものなべて麗うららならぬはなきものをなにか童の涙こぼせる

まんまろな朱あけの日輪空にありいまだいつくし童があたま

この泣くは仏の童子泣くたびにあたまの髪がよく光るかも

蓼々とうねり来くれども麗うららなる波は童をとらへざりけり

麗らなれば童は泣くなりただ泣くなり
 大海の前に声も惜しまず
 麗らかに頭さらしてその童泣けばこの世がかなしくなるも

雪夜

この庵にまこと仏の坐すかと思ふけはひに雪ふりいでぬ

冬青の葉に雪のふりつむ声すなりあはれなるかも冬青の青き葉

寂しさに堪へて吾が聴くしら雪の牡丹雪とぞなりにけるかも

澄み入りてわが身ひとつにふる雪のはては音こそなかりけるかも

めづらかに人のものいふ声ぞする思ふに空も明けたるならむ

煌々くわうくわうと光さすかとおと思ふ法身仏といつなりにけむ

見桃寺の鶏とり長鳴けりはろばろとそれにこたふるはいづこの鶏とりぞ

雪後

よくも青く晴れし空かな思ひきや屋根のかなたに涙おぼゆる

あかつきの雪に寂しくきらめくは木々に囀る雀があたま

木の枝に雀ひとりつら一列ならびゐてひとつびひとつにもものいふあはれ

蘇鉄の葉八方に開くこの朝明雪あさけしみじみと滲しみ滴たりにけり

冬青もちの木も雪をゆすれり椎の木も雪をゆすれり寂しき朝明あさけ

魚さかなさげてもものいふお作もち冬青もちの木の下にしまらく輝きにけれ

ほそぼそと雪せつご後の煙立つるめり赤き煙突屋根の煙突

今は雪深くくづれてしとすと庫裡くりの酢甕すがめに滲しみ滴たりにけり

馬の灸

生馬いきうまの灸きうするどころ見ゆるなり光あまねき野ぼらつ原うちの中

馬は馬頭觀世音なりはろぼろに嘶いなき来たれば悲しきものを

馬の頭をりをり光り大人おとなしく灸きうすゑられてありにけるかも

現身うつつしみの馬にて在ませば觀世音灸きうすゑられてありにけるかも

生馬の命かしこみ旃陀羅せんだらが火を点つけむとす空の高きに

あかあかと灸きう押しすゆる馬の腹馬はたまらず嘶きうきにけり

しみじみと馬やいとに灸やいとをすうる時馬かはゆしと思ひけるかも

おのれまた灸やいとすゑられあるごとし馬のこころにいつなりにけむ

詮せんずれば馬も仏ほとけの身なれども灸やいとすゑられて嘶なけばかなしも

不尽の雪

ひさかたの天に雪ふり不尽のやまけふ白妙となりてけるかも

れいろうとして天にくまなきふじのやまけふしろたへとなりてけるかも

うちいでて人の見たりけむ不尽のやまけふ白妙となりてけるかも

竜胆抄

かきわくるひと足ごとに竜胆りんだうの光りまたたく冬のあさあけ

犬を連れてゆけばかはゆき小笹原そこにも竜胆りんだうここにも竜胆

そこにもここにもあはれな小さい竜胆りんだうが咲いてゐる光つてまたたいてゐる

犬の眼も幽かに動く竜胆りんだうの花のいのちを見守るらしも

竜胆ひさを久みに凝視みつめし眼を深く心に向けつそこにも竜胆

竜胆りんだうが頭の中に光るなりたつたひとつの竜胆の花

麗々うらうらと足を洗へば竜胆りんだうの光りこぼるる心地こそすれ

相模のや三浦三崎は誰びとも不^ふ尽^じを忘れて仰がぬところ

相模のや三浦三崎は目の前に城^{じやう}ヶ島とふ島あるところ

相模のや三浦三崎は大まかに恵美須三郎鯛釣るところ

相模のや三浦三崎は蕪の絵を湯屋の廂^{ひさしゑが}に画けるところ

相模のや三浦三崎は屁の神を赤き旗立て祭れるところ

相模のや三浦三崎はありがたく一^{ひととせ}年あまりも吾が居しところ

相模のや三浦三崎の事思^{おも}へばけふも涙のながれながるる

雲母集余言

一心敬礼して此雲母集一卷を世に公にせむとするに当り、今更に覚ゆるは度ましい懺悔の涙である。一入にまた痛ましきは切々として新なる流離あらたの悲みである。光悦身に余りながら私はなほ自身の救ふ可らざる痴愚を感じる。私は少くとも不純であつた。今こそ私は目醒めて茲に謙讓の筆を執る、眞実は私の所念である。

本集は大正二年五月より三年二月に至る、相州三浦三崎に於ける私のささやかな生活の所産である。この約九ヶ月間の田園生活は、極めて短日月であつたが、私に取つては私の生涯中最も重要な一転機を劃したものだと自信する。初めて心霊が甦り、新生是より創まつたのである。

相州の三浦三崎は三浦半島の尖端に在つて、遙かに房州の館山をのぞみ、両々相對して、而も貴重なる東京灣口を扼してゐる、風光明媚の一漁村である。氣候温和にして四時南風やはらかに而も海は恍惚として常によるめいてゐる、さながら南以太利の沿岸を思はせる景勝の土地である。

私等の新居はこの三崎の向ヶ崎の浜にあつた。時俗呼んで今も向ヶ崎の異人館と云ふのがそれである。この家はもと長崎の領事をしてゐた老仏蘭西人がその洋妾と暫らく隠棲してゐた一構で、当時はその洋妾の所有になつてゐたのである。西洋式の庭は海に面して広く、一面に青芝が生へ、鍵かぎなり形になつた石の胸壁の正面には石段があり、棧橋があり、下には一艘の短艇ボートが波にゆられてゐた。家屋は日本風であるが海に向つて開いた玄関、廊下、翼家の欄間には流石に紅や黄の窓硝子が箝はめられ、庭の隅々にはまた紅い松葉菊を咲かしてあるといふ風に、如何にも異国趣味の瀟洒な住宅であつた。海は又どの室からも見えた。而して前には城ヶ島の緑が横たはり、通り矢とその間の五丁にも足らぬ海峡を小蒸汽が来、渡海船が通り、余多の漁舟が漕ぎつれて行く、而して遠くは煙霞の間に房州の山をのぞみ、歐洲航路の汽船軍艦はいつも煙を曳いてこの眺望の中を消えて行つたなど、全く明快な近代劇の舞台面であつた。

此処こゝに私の一家は可なり贅沢な、然し寂しい生活をした。

向ヶ崎の異人館生活は五月より十月迄引続いた。その間、父と弟とは遊び半分、殆ど夢見るやうな気持で、場所の有利なのを幸に、土地の漁船より新鮮な魚類を買ひ占めて東京の魚河岸に送る商買をはじめた。私は全く与らなかつたけれども、時折短艇に鮪や鯖やを載せて町の市場迄届けに行つたりした。夏帽子にホワイトシャツをつけ、黒い大きなネクタイをふつさりと結んだこの魚屋の短艇を見た時に土地の人は如何に驚いたであらう。この仕事は結局失敗に終つた。而して昔の九州の古問屋としての華やかなロウマンズの百が一の効果も得なかつた事に就て私は何より父に気の毒な感じを持つ。それやこれやで私たちの寂しい一家はまた都会の生活が恋しくなつて、秋が来るとすぐ東京に引上げて了つたのである。それで私だけは居残る事になり、二町谷の見桃寺（桃の御所）に移つた。而して翌年の二月、小笠原島に更に私が移住する迄の間、殆ど四ヶ月あまりの日月を、その寺の寂しい書院で静かな度ましい生活をしてゐたのである。

此三崎生活の内容に就ては作品が凡てを証明すると思ふ故、これ以外何にも言はぬ。只初めは小児のやうに歓喜に燃えてゐた心が次第に四方鬱悶の苦しみとなり、遂に豁然とし

て一脈の法悦味を感じ得たと信ずるそれ迄の道程は、本集に於て初めより終まで殆正しい系統を追つて、順序よく採録されてある。それを見て頂けば何よりである。

一旦東京を遠離してから、私の生活は一変した。地上に湧き上る新鮮な野菜や澆漉と鱗を飜す海の魚族は私の真実の伴侶であつた。従て、私は短艇を漕ぎ、魚介を漁り、山野を駈け廻る以外、当時に於ては、何ひとつ読みもしなければ、又殆ど創作する暇も無かつたと云つていい。ただ異人館時代に於て真珠抄の短唱数十首と、見桃寺に移つてから山海経、地面と野菜、閻魔の反射、法悦三品中の、それぞれその一部だけを得たのみである。その他は小笠原島や東京に帰つてから、幸に感興の再現を得て、筆を執つたものである。それでそれらの歌風に就ても非常に複雑してゐる。これだけは承知していただきたい。尚、此の三崎新居以前事情があつて、十日ばかり同処へ逗留してゐた事がある。「流離抄」の一篇はその時の歌である。

尚、三崎に關しては是等の歌以外私はまだ数十の詩篇を有つ。右は後日を期し、更に此の姉妹集として公にする計画である。

又曰ふ。此の中の四枚の挿画は一年前に画いて置いたものである。今から見れば極めて拙く、加ふるに木版師の手にわたる際に、一寸宛寸法を縮め過ぎた為め、あまりに小さな画になつたのは残念である。

兎に角此の雲母集一卷は純然たる三崎歌集である。而してこれらの歌が全く自分のものであり、私の信念が又、真実に自分の心の底から燦めき出したものに相違ないといふ事は、自分ながらただただ難有く感謝してゐる。自分を救ふものは矢張自分自身である。

滴るものは日のしづく、静かにたまる目の涙

大正四年八月

著者識

雲母集
畢

青空文庫情報

底本：「白秋全集 7」岩波書店

1985（昭和60）年3月5日発行

底本の親本：「雲母集」阿蘭陀書房

1915（大正4）年8月12日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※図は、底本の親本からとりました。

入力：光森裕樹

校正：岡村和彦

2014年9月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雲母集

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>